

01. 1. 私の視点
02. 2. 祈りのパースペクティブ
 - I. ひとりの祈り
 - II. 共同体の祈り
03. 3. 主にある者のパースペクティブ
 - I. 主の痛みを知りつつ
 - II. 主のいのちの中で
04. 質疑応答

※以下のレジメは、講演のために加藤先生が作成されたものです。

1. 私の視点

- (1) ひとりの信仰者として
- (2) 看取りの共同体・教会の中であって
- (3) み言葉を伝える者として
- (4) 信仰による希望を証しするために

2. 祈りのパースペクティブ

I. ひとりの祈り

(1) ヤコブの手紙5:13は、苦しみの中にある者に、自ら祈ることを求める。老いから死への歩みを生きる者は、その人自身が祈る者である。祈る者として生きる姿勢を最後まで保つ。看取る者は、それを重んじ、尊ぶことが求められる。人間の尊厳もまた、この祈りのパースペクティブにおいてまず理解されるべきであろう。

(2) 祈りは、その人の生涯を通じて続けられる。「死を生きる」ということは、まず祈りに関して体験される。祈りに関して

て、ただひとり神の前に立ち続ける。死における孤独は、ここで受け止められ、また克服される。

(3) 祈るべきこと、それは主が与えて下さった〈主の祈り〉に尽きる。神を神とする祈り、そして地上のいのちを支える恵みに生きる祈りである。特にその中核をなすのは罪の赦しを求める祈りである。

II. 共同体の祈り

(1) 祈りを生きることは、祈りの共同体である教会、特にその礼拝の交わりにおいてまず体験される。祈りは、常に教会に生きる者の祈りである。主イエスの家族である信仰の仲間と共に祈り、その祈りに支えられる祈りである。そこで自分の祈りもまた常に他者のための祈りとなることを覚える。

(2) ヤコブの手紙は、先の勧めに先立って、「あなたがたも、主の来臨が近づいているから、耐え忍びなさい、心を強くしていなさい」と教会を励ました(5:8)。教会は、主の再臨の望みに生きる共同体である。独りの死もまた、この望みの中で受け止められる。

(3) ヤコブの手紙は、病んでいる者は、教会の長老たちの祈りを求めるようにと勧めている(5:14)。教会はこの求めに応える。その祈りは病んでいる者に救いをもたらす力をもつ。教会の祈りは、老い、病み、死に赴く者を祈りをもって支える。癒されるべき者を愛をもって主のみもとに運ぶ教会なのである(マルコ2:3以下)。

(4) ヤコブの手紙は、病と共に罪を語る。祈りに生きる者は、罪の悔い改めと、主の赦しの恵みの確信に生きることを学ぶ。老いることにおいても罪を犯し、病むことにおいても罪を犯すことを知り、その罪からの赦しを求め続ける。それはまた、互いの赦しをも生む。この赦しなくして、真実の看取りもまた生まれまいであろう。

3. 主にある者のパースペクティブ

I. 主の痛みを知りつつ

(1) 「あわれみに生きたサマリヤ人」(ルカ10:30以下)が、傷ついた旅人を「気の毒に思った」という時、主イエスにしか用いない同情の心を表わす言葉がそこで用いられた。だからこのサマリヤ人は主イエスご自身のことだと理解することもある。しかし、ラザロやナインの若者の死をめぐって、激しく心動かされた主の同苦の心に、私どもの心もまた合わさるようになると主に招かれているのではないか。

(2) 主のみこころを受け止めたかのように、「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」ことを勧めるパウロは、それに続けて思い上がりを戒める(ローマ12:15,16)。人の傍に座する者の謙遜、それは老いていく者自身にも、看取る者にも、主が求めておられることである。

II. 主のいのちの中で

(1) 信じるとは、主イエス・キリストの復活を信じること、復活を信じるとは、主が自分に現れて下さったことを信じること(1コリント15:3以下)、それ故に、主のいのちの中で、今既に生かされることである。この甦りの主のいのちに生きるところに教会のいのちの伝統が生まれ、交わりが生まれたのである。

(2) 死を越える望みも、死後の生についての詳細な知識を得ることではなくて、私どもが主に「似るもの」となることであることを知っていれば、それでよいのである(1ヨハネ3:2)。

(3) このキリストの永遠のいのちの愛の中に生きる者は、愛とは耐えることであることを知る。信頼と望みと結びつく忍耐である(1コリント13:7)。そして、それが「不作法をしない」愛でもあることを心に留めたい(同,13:5)。自分のいのちも、共に生きる者のいのちも、心から尊ぶところを主から与えられたいと願う。聖霊の注ぎを心から待ち望みたいと願う。